

山崎豊子『大地の子』の成立

—作者の取材記録と文献資料を手掛かりとして—

唐 楚 輝

1. はじめに

山崎豊子『大地の子』は、1987年から1991年まで『月刊 文藝春秋』に連載された長編小説である。主人公は中国残留孤児の陸一心である。彼は元々満洲開拓団団員の息子であり、敗戦直前の逃亡途中で、家族と離散し、孤児となった。その後、中国人養親に引き取られ、中国人として育てられ、高等教育をも受けた。日本人であるが故に、文革で無実の罪を被り、迫害された。だが、冤罪を晴らして間もなく、日中国交正常化を迎え、両国提携の製鉄所建設は始まった。そして、日本語に堪能な主人公は、製鉄所建設をめぐる日中のビジネス交渉で重用され、共産党員と抜擢された。その際、商社で働いた日本人実父と偶然に再会した。結末で、実父が陸一心に永住帰国しようと請うが、陸一心は「大地の子」と自称し、中国に残ろうと決める。以上が作品の梗概である。

単援朝と劉迎は山崎は『大地の子』を書こうと決めたきっかけを、作品の後日談「『大地の子』と私」に基づき、概説した。¹⁾ だが、山崎が中国で、どのような人物に取材し、どこで調査したのか、単氏はこの二点を検討していない。また、先行論において、山崎がどのように参考文献の要素を作品に取り込んだのかを詳細に分析したものはない。

そこで、本稿は作者の取材活動記録と参考文献を手掛かりとし、『大地の子』が如何にして造られたのかを論じる。まず、作者はどのような素材を集めて、小説を組み立てたのかを検討する。具体的に言えば、取材記録を精査し、作者が取材と調査を通じて得た情報を如何にして利用したのかを明らかにする。次に、参考文献の内容をどのように作品のストーリーに取り込んだのかを分析したい。作品の素材を明らかにした後、参考文献と『大地の子』とを照合し、その違いを検討する。それによって、当該作品の独自性を浮き彫りにしていく。こうした分析を通して、山崎がどのように作品を成立させたのかを論じる。

(2)

2. 作品の素材

2.1 作者の取材活動

小説を執筆する前、山崎豊子は中国で三年に亘る取材活動を行った。その取材体験はエッセイ『「大地の子」と私』と秘書野上孝子の回想録『山崎豊子先生の素顔』に記される。便宜上、山崎の取材軌跡を左の「表1」にまとめる。

【表1 作者の取材軌跡】

年	取 材 行 程	備 考
1984 年	北京、東北（瀋陽、長春、ハルビンなど）、西北（延安、烏魯木齊、石河子、敦煌）、重慶、桂林、広州、上海	11 月 29 日、胡耀邦と初対面
1985 年	東北（長春、大連など）、新疆、延安、広州、西安	12 月 7 日、胡耀邦と会見
1986 年	東北、河北、寧夏、内蒙古、重慶、武漢、上海	10 月 23 日、胡耀邦と会見

表1で示されたように、三年間、山崎はほぼ中国全土を歩き回った。小説と照合してみると、東北（黒龍江省勃利県、長春、大連）、内蒙古、寧夏、北京、上海など数ヶ所の地域が小説の舞台として設定されていることが分かる。また、作品は「開拓団民逃亡」、「長春戦役」、「学生時代」、「文革」、「宝華製鉄所建設」、結末という六つのシーンで構成される。これらのシーンと舞台の対応関係は次に示す表2の通りとなる。

【表2 シーンと舞台の対応関係】

シーン	舞台
「開拓団民逃亡」	黒龍江省勃利県付近
「長春戦役」	長春
「学生時代」	長春、大連
「文革」	北京、内蒙古、寧夏
「製鉄所建設」	上海、北京
結末	長江三峡

以上のように、作品のシーンにはそれぞれ実在の場所が当てはまる。また作品を詳細に見ていくと、シーンと舞台の対応関係は、小説の組み立てにも深く関わっていることが分かる。即ち、山崎がどのように舞台を選んだのかということから、小

説がどのように組み立てられたのかを明らかにすることができるのである。

では、山崎は如何にして、作品の舞台を設定したのか。まず、作品の冒頭における「開拓団民逃亡」と「長春戦役」から検討する。舞台はなぜ、勃利県から、長春及び大連へ移ったのか。作者が取材をした人に注目したい。「開拓団民逃亡」について、当時、山崎は紅谷寅夫という残留孤児にインタビューした。紅谷の逃亡体験は以下ようになる。

逃避行中、佐渡開拓団でソ軍の虐殺に遭い、小学一年生の紅谷さんは、大人たちの死体の中をくるりくるとすり抜けて、奇跡的に生き延びたのです。紅谷さん以外にも子供が数人。それぞれ勃利の農家に貰われて、家族というより、労働力としてひたすら働かされ、紅谷さんは二度ほど脱走したそうです。一度は貨車に飛び乗って長春までたどり着いたということでしたが、結局、勃利に戻され、そこで成人し、結婚しました。³⁾

山崎は紅谷の逃亡経歴を小説主人公の陸一心に反映した。ただし、取り入れたのは、紅谷の佐渡開拓団跡事件から長春への逃走までの経緯である。佐渡開拓団跡事件で生き残った陸一心は、一番目の養父に虐待され、苦痛に耐えられずに、列車に飛び乗り、長春へ逃走した。だが、紅谷と違い、陸一心は勃利には戻らず、二番目の養父と出会い、長春に残った。そこで、小説の舞台は長春に移された。「学生時代(大学時期)」の舞台、大連に至っては、宝山製鉄所で働いていた実在の中国人通訳と関わりがある。その通訳の人生遍歴は、次のように記される。

製鉄所建設当初から、その仕事についておられたから、国籍は中国でも、心情的には日本人に近い。戦前、日本人が多く住んでいた大連生まれの大連育ち。大連工学院（現・大連理工大学）卒業で、鉄鋼、化学の知識も豊富である。⁴⁾

作品において、主人公陸一心はこの通訳と同じく、大連工学院に入学し、製鋼を専攻したと設定されている。つまり、山崎は通訳の人生経験を参考に、「学生時代(大学時期)」の舞台を大連に設定したと考えられる。特筆したいのは、大学卒業後、陸一心の勤め先が北京に設定されたということである。北京の中央機関で働けば、後の国家重大プロジェクトとしての製鉄所建設に参加できる。舞台を北京に移すことは、辻褄が合う。

さて、何故「文革」シーンの舞台はいきなり内蒙古と寧夏に決められたのか。それは張賢亮という中国人作家と深い関係がある。彼も山崎豊子の取材を受けたことがある。彼の経歴に注目してみよう。

文革中、“走資派”とレッテルを貼られ、北京からここ（筆者注：寧夏）に送られた党中央幹部、知識人は多かった。

作家・張賢亮氏もその一人で、先生を北京飯店へ訪ねて下さった。文革前の反右派運動で「右派分子」のレッテルを貼られて以降、二十年以上にわたって拘禁生活を余儀なくされた。現在は寧夏回族自治区が住居だという。⁵⁾

山崎は張賢亮に取材し、彼の文革体験を主人公に取り入れた。さらに、「製鉄所建設」の舞台について、山崎は「戦争孤児を何とか現代中国と結び付けるものはないだろうかと、（中略）考えた末、日中合作プロジェクトの上海宝山製鉄所の建設につなげられないものだろうかと思いついたんです」²⁾と作品のアウトラインを述べた。それ故に、作品において、「製鉄所建設」のシーン、及びその舞台を上海に設定したのである。

なぜ、長江三峡が物語の幕が下りる場所として選定されたのか。それは、山崎が長江三峡の船旅で、小説の結末を考え出したということである。どのように結末の着想を得たのかは、次のくだりを読めば分かる。

長江の川幅は広く、ゆったりとして来た。先生（筆者注：山崎豊子）は、ホルターのコーヒーカップを手に、サロンから出てこられた。しばらく周囲を眺めていたが、突然、「決まった」と声をあげられた。何が、と聞くまでもない。

二泊三日の船旅をした主人公が日本に帰って来てほしいと望む実の父親に対して、中国に残る決意を告げる“決め台詞”が決まったのである。

「私は大地の子です」

実際に三峡下りをしてこそ、生れ出た最後の主人公の台詞である⁶⁾

以上が、山崎が取材活動で小説の舞台を選んだいきさつである。本章では、山崎がどのように作品の組み立てたのかを明らかにした。山崎は紅谷寅夫、張賢亮などの数奇な生涯を持った人に取材し、彼らの経歴を素材として、小説に書き込んだ。それで、彼らの経験した場所も小説の舞台として描いた。こうして、山崎は各実在

の人物の生き様を繋ぎあわせて、作品を組み立てたのである。

但し、山崎はただ数人の経歴に基づいて小説を描いたわけではない。小説の内容を充実させるために、作者は、小説の舞台とした地域で、綿密な調査と取材を行った。筆者が調べたところ、山崎の取材活動は以下のようになる。

【表3 作者の取材活動】

シ ー ン	取 材 活 動
「開拓団民逃亡」	<p>① 1984年10月24日、黒龍江省牡丹江市で、石油精錬工場に勤務した張永海などの残留孤児を取材した。</p> <p>② 1984年10月27日、秘書の野上孝子氏と合流し、お互いに取材の結果を検討し、佐渡開拓団跡事件で九死一生を得た紅谷寅夫氏を見つけた。山崎は彼の体験の一部を主人公に取り入れようと決めた。</p> <p>③ 1985年6月、黒龍江省勃利県を訪ね、佐渡開拓団跡を実地に取材し、さらに勃利県の農家に滞在した。⁷⁾</p>
「長春戦役」	<p>① 1985年、中国社会科学院で働いた劉奔氏に取材し、その後、劉の養父にも取材した。⁸⁾</p> <p>② 1985年、10月14—18日、長春を訪れた。滞在期間の取材活動は次のようになる。</p> <p>A. 長春市の政府要員、大学教師及び作家と会見し、長春会戦の状況を聞き取った。</p> <p>B. 地元の電機工場、研究所で働いた戦争孤児に取材し、彼らの養父母をも訪ねた。</p> <p>C. 旧満州国崩壊後、日本関東軍の撤退情况及び国共内戦の長春会戦の状況を調査するために、戦跡の長春第九中学校を視察した。</p> <p>D. 長春会戦を背景とした映画『兵臨城下』を観賞した。⁹⁾</p>
「学生時代」	<p>大連工学院（現在の大连理工大学）を訪問し、十数名の先生と語り合い、中国人の大学生活を理解した。主人公の大学生活の書き方を決めた。（時間不詳）¹⁰⁾</p>
「文革」	<p>① 黒龍江省牡丹江市の労働改造所を見学した。（時間不詳）</p> <p>② 1985年7月、内蒙古の呼和浩特の労働改造所を見学し、犯人に取材した。¹¹⁾</p> <p>③ 1986年、寧夏の労働改造所を訪れて、犯人にも取材した。¹²⁾</p>
「製鉄所建設」	<p>① 1985年、当時の新日本製鉄名誉会長の稲山喜寛氏を訪ね、上海宝山製鉄所建設の取材許可を申請した。¹³⁾</p> <p>② 1985年11月28日から、上海宝山製鉄所を見学した。</p> <p>③ 1986年、宝山製鉄所の建設経緯について、中国冶金工業部部長などの官僚に取材した。¹⁴⁾</p>

取材記録によれば、山崎は残留孤児当事者、中国人関係者に取材したばかりではなく、現地を見学し、さらに滞在したことが分かる。こうして、作者は小説の骨組みを完成させた。だが、三年間、中国の全土を歩き回り、綿密な調査を行ったとは言え、リアルに中国のことを描けるはずはなかった。そこで、山崎は残留孤児に関するノンフィクション、中国の現代文学作品を参考にしていった。次の節では、『大地の子』と参考文献の関連性を分析していく。

2.2 参考文献と作品の接点

『大地の子』を創作するために、山崎は膨大な文献資料を読み漁った。本作の単行本が刊行された際、巻末で、106冊の参考文献が記されている。その種類と数を筆者がまとめると、以下のようになる。

【表4 参考文献】

種 類	数
①文革関係	24 冊
②現代中国・政治経済関係	10 冊
③開拓団、残留孤児関係	26 冊
④紀行、生活に関する文献	10 冊
⑤評伝	15 冊
⑥中国現代文学作品	15 冊
⑦鉄鋼関係	6 冊

以上のような膨大な文献資料を通じて、山崎は現代中国の知識を学んだだけでなく、ノンフィクションや、文学作品における内容の一部を意図的に『大地の子』に取り入れた。さて、どのような文献が作品の素材となったのか。筆者の調べでは、次のようになる。

【表5 参考文献と作品¹⁵⁾の対応関係】

文 献	作品に取り入れた部分	作品での相応な箇所	備 考
「果てしなく黄色い花咲く丘が」 ¹⁶⁾	〈ソ連参戦後の足どり〉(251～265頁)	第一冊二章「棄民」(60～67頁)	内容を改編
「満州・その幻の国ゆえに」 ¹⁷⁾	第二章「惨劇」(23頁)	同二章「棄民」(60～61頁)	言葉表現を引用
「シャオハイの満州」 ¹⁸⁾	「殺戮の開拓村」(80～84頁)	同二章「棄民」(67～71頁)	内容を改編

「卡子」 ¹⁹⁾	第三章「絶望都市・長春」 (111～196頁)	第一冊第三章「この子 売ります」(119～ 156頁)における「長 春戦役」のシーン	内容を参考にし、作品で再 編成
「満州脱出」 ²⁰⁾	第Ⅱ、Ⅲ章(57～94頁)		
「紅旗歌謡」 ²¹⁾	「歌唱毛沢東」(4頁)	同第四章(161～162頁)	抜粋し、直接 引用
「中国歴史」 ²²⁾	「九・一八事変」(44～ 45頁)	同第五章(174～175頁)	
「中国人として育っ た私」 ²³⁾	「共青团への勧誘」(118 ～122)	同第五章(179～185頁)	内容を参考
「中国残留孤児問 題」 ²⁴⁾	「文革時の苦しみ」(91～ 92頁)	同一章「小日本鬼子」 (9～27頁)	要素を取り入 れた
「土牢情話」 ²⁵⁾	人物、舞台、ストーリー 展開などの設定	同第六章「労働改造所」 (213～218)	設定を取り入 れた
「二つの祖国をもつ 私」 ²⁶⁾	「養父の名誉回復」(155 ～167頁)	同 十 一 章(384～ 387)	内容を参考
「黄の花びら」 ²⁷⁾	「あ、満州塩科郷」(102 ～110頁)	第二冊第八章「茨の 日々」(217～223頁)	同上
「再会—中国残留孤 児の歳月」 ²⁸⁾	二章から七章まで(45～ 177)	第三冊第三章(72～ 106頁)	同上
「不沈の大地」 ²⁹⁾	時代背景、舞台	「製鉄所建設」シーン	背景を参考
「天雲山伝奇」 ³⁰⁾	人物関係、ストーリー展 開	第四冊七章～九章 (211～282頁)	設定を取り入 れた
「長江漢詩紀行」	「長江三峡」(81～87頁)	同十章「三峡下り」	抜粋し、直接 引用
「実像の中国」 ³¹⁾	113頁	(331～332頁)	

作品の末尾で山崎は、106冊の参考文献を記した。筆者がそれらを調べたところ、表5に示した17冊の文献は作品と直接的な関係がある。作品の内容と比較してみると、参考文献の反映方法は概ね三つに分類される。まず、一つ目は、文献における言葉表現、詩歌などの内容をそのまま引用していることである。二つ目は、ノンフィクション、小説における設定、要素を取り入れていることである。三つ目は、ノンフィクション、小説の内容を参考にし、作品で再編成したことである。

2.3 まとめ

本章は、作家が如何にして、取材活動と参考文献から小説の素材を取り上げたのかを検討した。山崎は三年を費やし、中国全土を周遊し、残留孤児などの関係者に取材した。取材を通じて手に入れた素材を小説の骨組みとした。その上、作品の内容を充実させるために、文献を多読し、ノンフィクション、中国の文学作品を参考

にし、設定、ストーリー展開などの要素を改編し、作品に取り込んだ。

だが、取材情報と文献の内容を摂取し、積み重ねるのは、小説創作とは言えない。創作ならば、作品に独自性を持たせなければならない。では、『大地の子』の独自性はどこにあるのか。次章は、この問題を検討する。

3. 作品の独自性

前文で述べたように、『大地の子』は特に重要な17冊の文献に基づき、書かれた作品である。その中でも、『卡子』（遠藤誉著）、『土牢情話』（張賢亮著）及び『天雲山伝奇』（魯彦周著）が本作と最も深く関わると考えられる。ほかの文献からは要素、或いは言葉表現を作品に取り入れたただけであるのに対し、この三冊の作品からは内容、設定を摂取した。そして、『大地の子』における三つの重要なシーン（「長春戦役」、「文革」、「製鉄所建設」）を構成した。但し、参考文献の内容、設定を丸写しするのではなく、独創的に再編成したのである。これから、各シーンの内容を参考文献と照らし合わせて、作品の独自性の有無を論じる。

3.1 「長春戦役」と『卡子』

『卡子』は、旧満州（中国東北部）で生まれた遠藤誉氏が日本敗戦、旧満州国崩壊後の中国滞在期間を記録した自伝である。第三章「絶望都市・長春」には、1948年、国共内戦の長春包囲戦を記述している。遠藤の父親は旧満州国時代から、製薬会社に勤めていたので、敗戦後、帰国せず、当時の国民党政府に「留用」され、製薬の仕事を続けていた。1948年、国共内戦が始まり、共産党側の中国人民解放軍は長春を包囲し、都市に向ける食糧、水、電気などの補給を切断し、城内の国民党側の国府軍に兵糧攻めを行った。その後、長春市内は食糧断絶の惨状に陥り、やむを得ず、城外の「卡子」³²⁾を越えて、長春を脱出しなければならなかった。

同じく、『大地の子』にも、長春戦役を背景としたシーンがある。山崎は「長春戦役」シーンを書いた際、『卡子』を参考にしたと考えられる。両作品の内容が重なったので、剽窃が疑われた。1997年1月13日、『卡子』の著者遠藤誉は山崎が自分の著書の内容を無断利用したとして東京地裁に告訴した。遠藤の主張は次のようになる。

遠藤さんは「大地の子」のうち、とくにこの部分の記述を問題としており、(1)

マソウ子に入り、出るまでの遠藤さんの七歳のときの個人的な経験や心象風景がそのまま使われている (2) ストーリーの構成要素も並べ替えられて使われている (3) 表現も多数似通っている——と主張している。³³⁾

これに対して、山崎は応訴せざるをえなかった。双方は『大地の子』の剽窃疑惑をめぐり、四年近くの裁判闘争を行った。その結果、山崎が勝訴した。勝訴の理由については、次の判決文の抜粋を読めば分かる。

記述された歴史的な事実を、創作的な表現形式を変えた上、素材として利用することについてまで、著作者（遠藤誉）が独占できる（他者の利用を排除することができる）と解するのは妥当とはいえない。

（中略）歴史的事実、日常的な事実等を描くような場合に、他者の先行著作物で記述された事実と内容において共通する事実を取り上げたとしても、その事実を、いわば基礎的な素材として、換骨奪胎して利用することは、ある程度広く許容されるものと解するのが妥当である。³⁴⁾

傍線部の引用文によれば、先行著書で使用された歴史的事実を取り上げ、改編することは法的に容認されることが分かる。したがって、山崎が『卡子』の内容を取り上げ、改編した行為は著作権侵害ではない。

以上は一時取り沙汰された『卡子』剽窃事件の顛末である。だが、剽窃疑惑はまだ消えていない。その後、鵜飼清は両作品の類似点をめぐり、八か所の表現が酷似すると指摘した。³⁵⁾ だが、両作品を照合し、詳細に考察すれば、両作における八か所のよく似た表現では、三か所が解放軍の長春に対する包囲、兵糧攻めの様相に関する描写であり、他の五か所が長春脱出の際、主人公の体験であると分かる。上記の判決文によれば、解放軍の長春攻め、脱出の体験は「共通する事実」であり、「換骨奪胎して利用」しても、「ある程度広く許容される」と考えられる。さらに、長春脱出の経験について、山崎が「朝日新聞」の取材を受けた際、次のように力説した。

「②遠藤さんは違う部分は抜いて、似ているところだけ集めている。（中略）マソウ子の経験は父と私だけのもので侵すべからずといわれるが、①中国の統計では、百万人以上が経験したことです」

山崎さんは、中国人五人、日本人二人から取材したことを明らかにした。秘書が、「取材ノート」と墨書された分厚いノート二冊を持ってきた。取材された人の名前、取材日時が鉛筆で書かれ、「人肉」、「死体累々」など惨状を象徴する部分に赤線が引いてあった。³⁶⁾

まず、傍線部①に注目したい。山崎は自作が『卡子』とよく似た表現があると否認しなかったとは言え、自分の取材ノートを示し、長春脱出が遠藤誉自身だけの体験ではなく、他人も経験した「共通する事実」であると証明した。つまり、長春脱出に関する表現も「許容される」程度だと思われる。

それから、傍線部②での「違う部分」に眼を付けたい。「違う部分」には、『大地の子』の『卡子』と区別した独自性があると考えられる。分析の便のために、大きな違いだけを次の表にまとめてみる。

【表6 両作品における「長春戦役」の差異について】

	卡子	大地の子
主な登場人物	遠藤誉氏本人、両親、兄弟、日本人同士のH氏一家、M氏一家	陸一心及び養父母
長春の住所	新京製薬（都心の大同広場付近）	城内（中国人街、都市の東北部）
父親の身分	製薬専門者なので、国民党政府に「留用」され、丁重に扱われた。一方、共産党側と繋がりがある。	小学校教師、一般市民
主人公が急病に罹った時期	長春戦役の最中、栄養失調をもたらした。また右肘の傷口が結核菌に感染し、身体に腫物が出来た。	長春戦役の前に、黒脇病に罹り、高熱に苦しんだ。
長春脱出の時期	1948年9月20日	1948年8月初旬
結末	遠藤一家はほかの日本人同士を見捨てざるを得なく、製薬会社のメンバーだけ検問所を通過させた。	養父母と陸一心は無事に検問所を出た。養父が自分の安否を顧みず、自分を救ってくれたことに感動し、陸一心は中国人の息子となろうと決めた。
長春脱出後の行方	延吉に滞在し、朝鮮戦争勃発後、天津に辿り着いた。暫く天津に泊まり、その後、帰国。	陸の一家は長春郊外の范家屯に泊まった。高校卒業まで、主人公は范家屯で過ごした。

表6で示されたとおり、両作品は同じ歴史事件を描いたにもかかわらず、各重要な設定は大いに異なっていた。注目したいのは、結末における検問所を通過する場

面である。『卡子』で、遠藤氏の父親は、同行の日本人同士を見捨てせざるを得なく、同胞の罵声を浴びながら、家族と社員だけを連れて、検問所を出て、長春を離れた。これに対して、『大地の子』では、読者を感動させるシーンが作り出された。

陸徳志は、人の流れに逆って柵門へ駆け寄った。

「その子は、私の子供です、一緒に出して下さい」

「お前の子供が、どうして中国語がおかしいのだ」

「それは……それは子供の時、吃だったのを、無理に矯正したからです」

「ふうむ、ほんとか、朝鮮人の日本語のできる兵隊を呼んで調べさせるぞ」

(中略)

「あの子は、私のたった一人の息子です、十歳の子供が、あの地獄の中を生き抜いたのです、①どうか生かしてやって下さい、その代わりに私が卡子の中へ戻ります」

と云った。上級者らしい男は、柵の中で呆然と立ち竦んでいる少年と、陸徳志を見比べ、銃を構えている兵隊に

「同志、あの柵の中へ戻れば餓死することが解っていて、なお且つ、子供だけを助けようとするのは、われわれ共産党と解放軍の基本精神だ、受け入れよう」

と命じると、徳志と一心を阻んでいる銃剣が解かれ、一心の体が柵の外へ押し出された。②その瞬間、一心は狂ったように声を上げた。

「爸爸！（パパ）爸爸！」

徳志の首にしがみつき、体をよじって泣いた。これまでどんな状況の中でも口にしなかった「爸爸」という言葉が、はじめて一心の口をついて出たのだった。³⁷⁾

まず、傍線部①を分析したい。陸一心の身分が検問所の解放軍兵士に疑われた際、養父の陸徳志は敢えて卡子の中へ戻り、その代わり、陸一心を放とうと言った。つまり、養子のために、自分を犠牲にするのである。それから、傍線部②で、陸一心が陸徳志に「爸爸（パパ）」と呼んだ場面を分析する。この場面は、長春脱出前、陸徳志と陸一心の対話と呼応する。その対話は以下ようになる。

「どうしてだ？このままでは餓死してしまうぞ」

「(前略) ここを出たら、もう妹と一生、離れ離れに……、妹と一緒に日本へ帰りたい……」

妹への思いが、堰を切った。陸徳志は凝然とした。駅前の人攫いから救い出し、一年近く寝食を共にし、もはやわが子と信じきっていた一心の言葉に暫し度を失ったが、

「そうか—お前、やはり日本へ……」³⁸⁾

引用文で示されたように、そもそも、陸一心は陸徳志を父親として見做していなかった。やはり、妹の行方を捜し、そして、妹と共に帰国しようと思っていた。だが、検問所で、陸徳志が必死に彼を救出する行動を見、彼は遂に感動し、陸徳志を父親として受け入れた。その後、これから、中国人となろうと決めた。作品全体から見れば、検問所脱出の場面は、重要な転換点である。その場面によって、陸一心のアイデンティティ意識は大きく変わって来た。これに対して、『卡子』では、忠実にその日の出来事を記述しただけなのである。検問所を出る場面から、山崎のオリジナリティが読み取れる。

3.2 「文革」シーンと『土牢情話』

『土牢情話』は中国反思文学の開拓者張賢亮の代表作である。その作品は、張賢亮の文革体験を元にして、書かれたものである。山崎は『大地の子』の「文革」シーンを書いた際、『土牢情話』を参考にしたと考えられる。表5で示されたように、山崎は『土牢情話』の設定を自作に取り入れた。両作品を照合すれば、共通点は以下のようになる。

- ①物語の舞台が労働改造所と牢獄である。
- ②犯人同士が文革で迫害された政治犯に限らず、刑事犯もいる。
- ③主人公と親密な関係を持つ女性が登場する。
- ④主人公の反抗意識を呼び覚ます人物がいる
- ⑤最後、主人公は知恵を絞り、圧迫者と斡旋し、自分の運命を変えた。

五つの設定から、『土牢情話』と『大地の子』の文革シーンのストーリー展開及び結末の類似性が読み取れる。一方、三番目の設定には、山崎のオリジナリティが含まれる。次に、『土牢情話』の女性人物と比較しながら、『大地の子』における女

性人物設定の独自性を論じる。

『土牢情話』では、一人の女性看守人喬安萍が登場する。彼女は主人公の石在に好感を持ち、常に秘かに食べ物を贈る。石在は犯人同士に唆され、喬安萍を経由して、刑務所内の不正を告発する手紙を出す。これに対して、喬安萍が暴行された際、石在は怖気づいて、見過ごした。こうして、主人公石在と犯人同士は不正を告発したため、釈放された。だが、石在に利用された喬安萍は不幸な一生を過ごした。『土牢情話』における女性像について、竹内実は以下のように評価した。

善良で、不幸な時代に弄ばれた、薄幸の女性たちである。(中略) 李安萍(筆者注:原作では、喬安萍である)という女看守(『土牢情話』)が挙げられよう。彼女たちは、自らどうすればよいかわからず、その不幸を運命として従うのみである³⁹⁾

運命に逆らうことができず、不幸になる喬安萍と違い、山崎が描く女性は不幸な運命に抗おうとする、粘り強い人物である。『大地の子』の「文革」シーンにおいて、主人公陸一心と親密関係を持ち、その後、結婚した女性が登場した場面は次のようになる。

病室の隣の治療室では、北京から派遣された巡回医療隊の医師二人と看護婦八人が集り、労改の囚人である陸一心に貴重な血清を打つべきか、打たざるべきかを論議していた。

(中略)

「江月梅同志、あなたの意見は？」

最初に発言した看護婦が云うと、髪をお下げに編み、清楚な顔だちの看護婦は、「同志たちの主張は、毛主席の思想を守った正しい意見と思いますが、ただ一つだけ付け加えさせて戴きたい事実があります、それはあの囚人は決して人民に敵対する立場でないということです、私たちの医療隊のトラックが道路の溝へはまり込んで困っていた時、あの囚人は身を挺して、トラックを動かすことに力を貸しました、そのため、この内蒙古自治区の旗(県)の革命委員会副主任の生命を救うことが出来ました、旗の数万の人民の指導者の命を救ったことは、同数の人民を助けたことと同じです」⁴⁰⁾

政治的教条に囚われ、躊躇っていた人々と違い、医療隊を手伝ったことがある、政治犯の陸一心は決して敵ではなく、救うべき人だと江月梅は巧妙に力説する。そこから見れば、江月梅は他人の意見を繰り返さず、自分なりの意見を持っている。また、江月梅は陸一心が冤罪を被ったことを知り、自分が危険な状態になってもそれを恐れず、手を尽くし、陸一心の消息を養父の陸徳志に報せた。冤罪を晴らした陸一心は、再び北京で、江月梅と再会するのである。

「冤罪が雪がれて釈放され、もとの単位に戻り、国交が回復されても、私が日本人の血をもった反革命分子として労改へ送られた歴史的汚点は档案（身上書）に入れられ、生涯、私に付いて廻る、どうしようもないことだ」

月梅は葉を落した湖畔の樹へ視線を向け、一心の言葉を聞いていたが、
「それはあなただけでなく、多くの人民が苦しんでいることだわ、私の場合は、
“自殺した右派の娘”という烙印が終生、消えないのよ」

月梅の眼が哀しげに潤んだ。一心は慰める言葉に窮した。沈黙の中で、雪が次第に激しく降りはじめた。

「苦難の中で播かれた種は、どんな風雪にも耐え、必ず芽ぶくものだと云われていますわ」⁴¹⁾

江月梅は主人公陸一心と同じく、不幸な運命を背負ったが、自分の運命を変えられと信じた。主人公もその信念に励まされ、悲運を乗り越えようと決めた。さて、山崎はこの女性人物をどのように作ったのか。秘書の野上孝子が受けたインタビューから、江月梅の設定経緯を読み取ることができる。

一番頭を抱えたのは、妻の人物設定でした。日本人の種である一心を受け入れるのは、人種や民族の差別意識を超えた博愛の精神がなければなりません。博愛の象徴である職業といえば……ということ考えて付いたのが、看護婦さん。⁴²⁾

ここにあるように、山崎は妻の江月梅を設定する際、陸一心の中国残留孤児という身分に配慮し、博愛精神を持った看護婦として設定した。そこから見れば、『土牢情話』でただの配役としての喬安萍より、江月梅はさらに詳しく描かれ、設定にも山崎独自の着想が含まれると分かる。

3.3 『天雲山伝奇』との関わり

『土牢情話』に次ぎ、『天雲山伝奇』は『大地の子』と深く関わる中国の現代文学作品である。当該作品は魯彦周に創作され、新中国建国後、最初の「誤り」とされる1957年「反右派闘争拡大化」を反省する小説である。小説の梗概は次のようになる。主人公宋薇は地方の共産党支部の組織副部長を務め、「反右派闘争拡大化」以来の冤罪事件を覆す。偶然の機会によって、部下の周瑜貞から、元恋人の羅群が冤罪を被り、天雲山で左遷された話を聞き及んだ。彼女が調査したところ、羅群の妻の馮晴嵐が書いた陳情書は、自分の上司且つ夫である呉遥に留められていた。さらに、呉遥が羅群を嵌めた張本人だということが発覚した。その後、夫の威圧に屈せず、宋薇は周瑜貞と協力し、羅群のために陳情し続けて、ようやく、羅群の冤罪を雪いだ。

山崎は『天雲山伝奇』のストーリー展開に依拠し、『大地の子』のエピローグを作り出した。『大地の子』のエピローグで、陸一心は同僚の馮長幸に陥れられ、製鉄所建設プロジェクトから外され、内蒙古の製鉄所に左遷された。陸一心の元恋人の趙丹青は、偶然、夫の馮長幸が陸一心を嵌めたことに気づいた。その後、趙丹青が夫の不正を告発したため、陸一心は再び、冤罪を晴らすことができた。

上記の両作品の梗概を読めば、両者のストーリー展開の類似性を確認できる。元恋人の冤罪を晴らすために、夫の不正を暴き、遂に元恋人の名誉を回復させた。だが、両作品の結末の部分に注目したい。『天雲山伝奇』の結末で、宋薇は元恋人に会うために、天雲山に戻った。しかし、彼女は羅群が周瑜貞と一緒に妻の馮晴嵐の墓へ参るところに出くわした。その際、彼女は羅群と会うことを断念した。宋薇の心理描写は以下になる。

私は晴嵐から何を学ぶべきなのか。ついさっきまで私は分っていなかった。狭い、個人的な感情の範囲を一步も出ていなかった。人生にはもっと高い境地——正しい理想や意志、人民と党のために闘うという規範と献身的な精神がなければならぬのだ。これこそ晴嵐の語ったことであり、彼女はなすべきことをやり遂げたのだ！

(中略)

そして黙って彼女の冥福を祈り、同時に羅群と周瑜貞にも、ひそかに私の敬虔な祝福を献げた。⁴³⁾

個人の感情を抑えて、元恋人との再会を諦めた宋薇と違い、『大地の子』の中で、趙丹青は左遷地の内蒙古に赴き、直に陸一心に会った。再会した後、二人の対話は次のようになる。

「私、今まで、あなたに対してひどいことをして来たけれど、これで許して貰えるかしら」

大きな瞳が訴えるように、濡れ光っていた。一心は即座には答えられなかった。

「すぐには許せないあなたの気持は解るわ、でも私は、どうしても、許してほしいの」

「許すなど、僕の方こそ、僕のためにここまでして貰って、すまない」

「いや、そんな他人行儀な云い方、許すと云って——」

(中略)

「抱いて、もっと強く、私はもう自由なのよ」⁴⁴⁾

宋薇と趙丹青は共に、元恋人に未練があるため、元恋人に会いに行った。だが、宋薇は元恋人の羅群が部下の周瑜貞と付き合っていることに気づき、再会を諦め、元恋人に対する未練を「正しい理想や意志、人民と党のために闘うという規範と献身的な精神」へと昇華させた。作者の魯彦周は宋薇を滅私奉公の共産党幹部として描いた。このような人物造形は当時の中国の時局に配慮するためだと考えられる。

一方、趙丹青の造形について、山崎は「長編小説を成功させるためには、音楽という音域を広くとる必要があります。(中略) 音域を広くするために、たとえば江月梅という貞淑な女性に対して、趙丹青という奔放な女性を登場させる。(中略) 最高と最低を描き分けてアクセントをつけると、人物がみな動いてくれるのです。」⁴⁵⁾ と話した。確かに、趙丹青は世間の慣習に囚われず、自分の思うまま行動する性格の持ち主である。そして、元恋人の冤罪を晴らした後、直に陸一心と再会し、過去の非礼の許しを求める。

何故、陸一心の許しを求めるのか。大学時代、趙丹青は陸一心の残留孤児の身分を知り、頑なに陸一心と別れた。それ故に、陸一心は自分の身分に対して、より深い劣等感を持った。さらに、趙丹青との別れは彼の中国人となる信念を挫いた。一方、趙丹青も陸一心に気が咎めていた。そのため、趙丹青にとって、元恋人の冤罪を晴らすことは「罪の償い」である。これに対して、『天雲山伝奇』では、宋薇と

羅群の別れは詳しく描かれなかった。また、宋薇にとって、元恋人の冤罪を晴らすことは自分の立場上の責務であるという点で、『大地の子』とは、その意味が根本的に異なる。

3.4 まとめ

本章では、『大地の子』と一部典拠となった『卡子』、『土牢情話』及び『天雲山伝奇』を照合し、違いを明らかにした。ただ、当時の出来事を記録する『卡子』と違い、『大地の子』における検問所を出る場面はストーリー展開の重要な転換点として描かれた。『土牢情話』で、喬安萍はただ文使いという配役として登場する。一方、『大地の子』で、江月梅は陸一心を救出し、物語の中で重要な役割を果たしたのみならず、運命に屈せず、意志の強い女性として描かれた。『天雲山伝奇』と同じパターンがあるにもかかわらず、両作における主人公と元恋人の関係の描き方が違う。『天雲山伝奇』で、羅群が曾て宋薇と恋愛関係を持つことはただ人物関係の設定であり、別れた後には、二人のやり取りが描かれない。『大地の子』での、陸一心と趙丹青の関係及びやり取りは、重要な一環として書かれた。以上のように、山崎は参照した作品の内容を鵜呑みにせず、ストーリー展開、人物設定、主人公と配役の関係などの面で、自分の意匠を凝らして改編し、『大地の子』に取り入れたのである。その違いこそが、『大地の子』の独自性である。

4. 終わりに

本稿では、山崎豊子の取材活動記録、参考文献を精査し、『大地の子』がどのように成り立ったのかを検討した。まず、中国での取材活動を辿りながら、小説を書くために、山崎がどのような調査をしたのかを明らかにした。さらに、『大地の子』を創作するために、作家が参考にした106冊の文献を調べ、そのうちの17冊の文献が深く関わっていることと指摘し、さらに三冊の『卡子』、『土牢情話』、『天雲山伝奇』をより詳細に取り上げ、各文献の内容を作品にどこまで取り入れ、独自性を持たせたのかを論じた。

また、かつて一時取り沙汰された『卡子』剽窃事件に注目し、『大地の子』の作品としての独自性を確認していった。筆者の調査したところ、ノンフィクションの『卡子』、中国反思文学代表作の『土牢情話』、『天雲山伝奇』は『大地の子』と深く関わっていることが判明した。だが、これらの作品を『大地の子』と互いに照らし

合わせて読めば、山崎がこの三部作品の内容を全て忠実に取り入れたのではないことが分かる。そこで論者は、物語の筋、人物造形、登場人物間の関係をめぐり、『大地の子』の違いを論証し、作品の独自性を浮き彫りにした。

検討したところ、これらの三部作品の要素を摂取し、作家自身の着想によって改編し、作品『大地の子』に取り入れたと分かる。『卡子』における検問所が出る場面を取り上げ、養父が自分の安否を惜しまず、自分を救出することに感動し、ひたすら帰国しようとした主人公がこれから、中国人となろうというドラマチックなシーンに再編成した。それから、『土牢情話』での喬安萍という女性人物に依拠し、山崎が作中で江月梅という主人公の妻を設定した。不幸な運命に従った喬安萍と違い、江月梅は主体性を持ち、努力して悲運を越えようとした女性と造形された。『天雲山伝奇』における物語の筋はストーリー構成の素材として、『大地の子』に取り込まれた。しかし、両作品を照らして読めば、相違点が見つけられる。『天雲山伝奇』で、宋薇が如何にして、元恋人の羅群の冤罪を晴らしたことは物語の主軸である。宋薇と羅群の関係はただの設定であり、詳しく描かれたことがない。これに対して、『大地の子』において、陸一心と元恋人の趙丹青のやり取りは物語の中心として描かれているのである。趙丹青が陸一心の冤罪を雪ぎ、それをきっかけにして、陸一心との関係を修復したことは、作品前半部で、趙丹青が陸一心の残留孤児身分が分かり、陸一心と別れた場面と呼応する。以上のように、山崎が各原典の物語展開、登場人物の造形、人物間の関係など要素を取り上げ、自分の着想を込めて改編し、『大地の子』を造ったのである。

注

- 1) 単援朝, 「日中女性作家が描いた中国残留孤児像: 山崎豊子『大地の子』と巖歌苓『小姨多鶴』を読む」(『跨境: 日本語文学研究 6』2018年). p.35
劉迎, 「山崎豊子『大地の子』にみる一九八〇年代の日中関係」(『岡山の記憶』第19号・2017年). p.59～60
- 2) 山崎豊子, 「伝えること一。それが生き残った私の使命です」(『SOPHIA』, 1993年2月). p.228
- 3) 朱琳, 「野上孝子氏インタビュー 山崎豊子と『大地の子』」, 『城西国際大学日本研究センター紀要 (8)』, 2017年. p.56
- 4) 野上孝子, 『山崎豊子先生の素顔』, 文春文庫, 2018年. p.186
- 5) 注 (4) に同じ. p.199

- 6) 注(4)に同じ. p.194
- 7) 山崎豊子, 『『大地の子』と私』, 文春文庫, 2003年. p.36～47
- 8) 劉奔著 山口勇訳, 「中国残留孤児を真に理解しているのは誰か」, 『週刊金曜日』6〈48〉, 1998年. p.27
- 9) 国晏, 「日本著名作家山崎豊子来長採訪」, 『社会科学戦線』(1986年01期). p.23
- 10) 注(4)に同じ. p.189
- 11) 注(4)に同じ. p.191～192
- 12) 注(4)に同じ. p.199～200
- 13) 注(4)に同じ. p.185
- 14) 注(4)に同じ. p.195～199
- 15) 作品とは、文春文庫に刊行された文庫本『大地の子(一)～(四)』に拠る。
- 16) 「野上孝子氏インタビュー 山崎豊子と『大地の子』」(朱琳『城西国際大学日本研究センター紀要(8)』, 2017年)によれば、主人公所属の信濃郷開拓団の原型は北満の東索倫河畔における「埴科郷」開拓団である。山崎は「埴科郷」開拓団の団誌「果てしなく黄色い花咲く丘が」(埴科郷記念誌編集委員会, 1978年5月)を参考にし、『大地の子(一)』二章の開拓団逃避行を描いた。
- 17) 当該文献(林郁, 「満州・その幻の国ゆえに」, 筑摩書房, 1983年)における「無敵関東軍」、「根こそぎ動員」などの言葉表現は作品で引用された。
- 18) 主人公は佐渡開拓団跡事件から生き残ったが、家族と離散し、孤児となった。山崎は「シャオハイの満州」(江成常夫, 新潮文庫, 1988年)に記された佐渡開拓団跡事件生存者の紅谷寅夫の経歴を主人公に取り入れたと思われる。
- 19) 山崎は遠藤誉の『卡子』(文春文庫, 1990年)における長春戦役の記述を参考にし、『大地の子』における「長春戦役」のシーンを書き換えた。
- 20) 「卡子」と同じく、本書(「満州脱出一満州中央銀行幹部の体験」, 武田英克, 中公新書, 1985年)に書かれた満州中央銀行幹部の長春戦役体験も作家の参考内容である。
- 21) 小学校の授業の場面において、「永遠跟着毛沢東」という詩歌が引用された。中国の小学校国語教科書の内容を引用したと考えられる。但し、この詩歌の初出は「紅旗歌謡」(郭沫若 周揚編, 紅旗雜誌社, 1959年)の5頁の『歌唱毛沢東(毛沢東を謳おう)』である。
- 22) 『大地の子(一)』の五章で、主人公中学校時代の歴史授業の場面は描かれた。授業の内容は九・一八事変(満州事変)である。出典は中国の高校歴史教科書『中

国歴史』（劉恵吾等編、人民教育出版社、1957年）の44～46頁である。

- 23) 『大地の子』で、主人公が共青团に加入したというエピソードがある。これは『中国人として育った私』（西条正、中公新書、1978年）における当事者の入団体験を参考にして、書いたことだと考えられる。但し、主人公と違い、その当事者は入団できなかった。
- 24) 『大地の子（一）』の一章で、文革の際、陸一心が日本人である故に、「スパイ」という冤罪を被り、批判された場面は描かれた。それは、山崎が『中国残留孤児問題』（中野謙治、情報企画出版、1987年）での91～94頁の内容を参考にして描いたと考えられた。
- 25) 『土牢情話』は張賢亮の自身の文革体験を題材にした作品である。山崎はこの作品における人物設定、舞台、一部のストーリーを『大地の子』に取り込んだと思われる。
- 26) 「二つの祖国をもつ私」（西条正、中公新書、1980年）で、当事者は迫害された養父を救い、その上、養父の名誉を回復させた。山崎はそれを参考にし、養父陸徳志が主人公を救ったエピソードを書いた。
- 27) 『黄の花びら』（斎間新三、郷土出版社、1987年）の作者は元開拓団の村民であり、敗戦直前、日本本土に帰り、満州における家族と離散した。山崎は彼の経験を参考にし、主人公の日本人実父を造形した。
- 28) 曾て、長野県阿智村の長岳寺住職である山本慈昭は「日中友好手をつなぐ会」を率い、残留孤児を探すために、中国東北を訪ねた。その出来事は「再会—中国残留孤児の歲月」（山本慈昭・原安治、日本放送出版協会、1981年）に記述された。山崎はそれを小説的に改編した。
- 29) 『不沈の大地』（作者は羅来勇であり、本作は「鮑爾斯先生、再見」〔解放軍文芸出版社、1984年〕に収録された。）は上海宝山製鉄所建設を背景とした小説である。山崎はこの作品を参考にし、自作のプロットを作ったと考えられる。
- 30) 『天雲山伝奇』において、主人公は無実の罪を着せられ、左遷された。主人公の元恋人は、主人公の冤罪を晴らした。『宝華製鉄所建設』で、似たストーリーの展開がある。
- 31) 小説の結末で、主人公は日本人実父と共に長江の旅をした際、李白の「早発白帝城」を詠った。小説における漢詩の要素は、『長江漢詩紀行』（渡部英喜）の「長江三峡」（81～87頁）及び『実像の中国』（岡田臣弘）の113頁に基づいて作られたものと考えられる。

- 32) 当時、長春の郊外で、国府軍側と解放軍側にはともに「卡子（チャーズ）」、つまり検問所が設置されていて、国府軍側から出ると、再び戻ることはできなかった。そして、解放軍側の検問所を通ることは容易なことではなかった。
- 33) 朝日新聞（朝刊）。『小説「大地の子」めぐり著者・山崎豊子さんを提訴 遠藤・筑波大教授』。1997年1月14日。p.29
- 34) 東京地裁。『「大地の子」の著作権侵害事件』判決文。2001年3月26日。〈<http://www.translan.com/jucc/precedent-2001-03-26.html>〉(2020年8月18日アクセス)
- 35) 鵜飼清。「山崎豊子問題小説の研究—社会派『国民作家』の作られ方」。社会評論社。2002年。p.96～97
- 36) 朝日新聞（週刊）。『「大地の子」の良心度 今度は盗用騒ぎで話題に』。1997年1月14日。p.20
- 37) 山崎豊子。『大地の子（一）』。文春文庫。1996年。p.156
- 38) 同上。p.135～136
- 39) 竹内実 荻野脩二編著。『中国文学最新事情』。サイマル出版会。1987年。p.79
- 40) 注（37）に同じ。p.293～294
- 41) 山崎豊子。『大地の子（二）』。文春文庫。1996年。p.74
- 42) 朱琳。『「野上孝子氏インタビュー」—山崎豊子と『大地の子』』。城西国際大学 日本研究センター紀要（8）。2017年。p.57
- 43) 田畑佐和子 田畑光永編訳。『天雲山伝奇』。垂紀書房。1981年。p.97～98
- 44) 山崎豊子。『大地の子（四）』。文春文庫。1996年。p.281～282
- 45) 山崎豊子。『「大地の子」と私』。文春文庫。1999年。p.28

（とう そき／本学大学院生）

